



特定非営利活動法人
自然文化誌研究会 会報誌



138 号

2019 年 12 月 10 日発行号

『第 16 回 NPO 法人 自然文化誌研究会 通常総会』のご案内

2004 年に東京都の認証を受けてから、第 16 回目の総会を行います。正会員の皆様はぜひご出席ください。また出欠を同封のハガキでお知らせ下さい。このハガキは欠席の場合は委任状となっております。ご意見などもお気軽にお寄せください。なお、正会員以外の会員の皆様もオブザーバー参加が可能です。

日時：2020 年 2 月 15 日（土） 15:00 開始～16:30 終了予定

場所：神奈川県相模原市緑区藤野町 藤野中央公民館 の予定

＜住所：神奈川県相模原市緑区小淵 1992 Tel：042-686-6151＞

議題： ①2019 年活動報告 ②2019 年収支報告 ③2020 年活動計画

④2020 年収支予算 ⑤その他 ＊終了後に懇親会も予定しております。

＊会場が藤野地域内での変更の可能性もありますので出席を予定されている方は事前に必ず、事務局までハガキか電話かメールにて出席の予定をお伝えください！！

「冒険学校 まふゆのキャンプ」 12.26～28(2泊3日)

毎年恒例の冒険学校「まふゆのキャンプ」を体験して、暖かいお正月を迎えませんか？

小菅村ではお正月の準備がもうはじまる頃です。日中は、村内を自由に動き、村の中でもちょっと面白いところに行きましょう。焚火・薪割り・ナイトハイク・星空観察・バードウォッチング・滝探検・・・その場で思いつく限り、いっぱい遊んで、食べて、寝る。そんなキャンプです。

個性あふれるスタッフがみなさんの参加を待ってます！

日 程：12 月 26 日（木）～28 日（土）

場 所：小菅村のいつものキャンプ場

宿 泊：テント・ログハウス・野宿など

対 象：小学校 3 年生～中学校 3 年生

定 員：25 名（先着順です）

参加費：会員 ¥26,000 非会員 ¥28,000

（奥多摩駅からの交通費・食費・宿泊費・保険代などが含む）

申込み：まだ定員に達していません。ハガキ・もしくは E-mail に住所・氏名・年齢（学年）・性別・電話番号を記入の上、事務局まで参加をお伝えください。

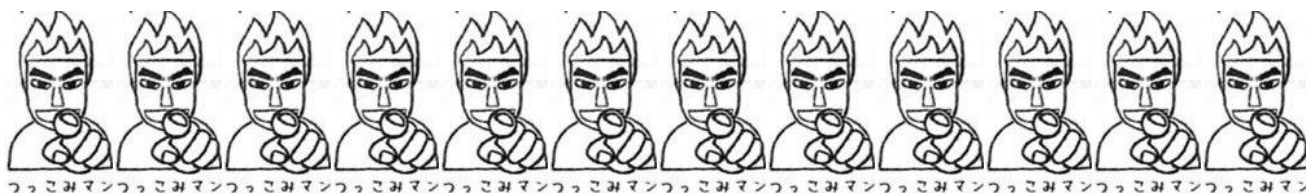


この事業は平成 31 年度 国土緑化推進機構「緑と水の森林基金」の助成を受けて開催します。

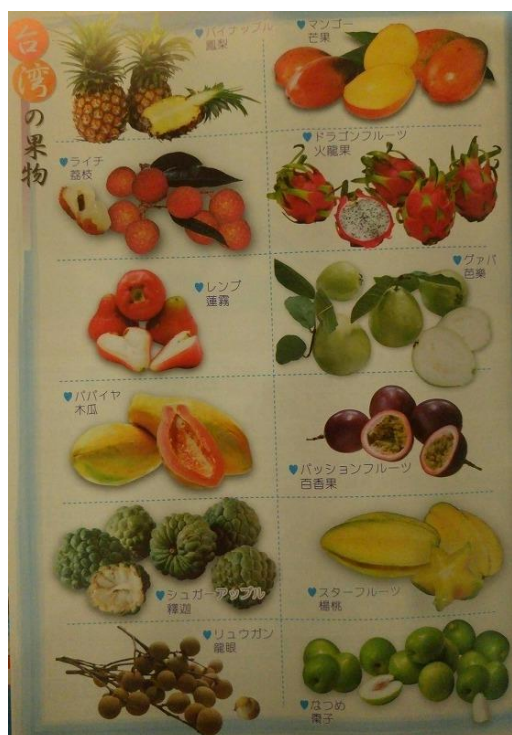
『INCHの楽しい仲間たち』 vol.11 その1

『ツッコミマンの台湾を知ろう!』

文と写真：井上尚子



君は台湾という国を知ってるか？沖縄より南に位置する台湾は、夏も冬も一年中おいしいフルーツであふれかえっている素敵な国だ！よく知られたフルーツだとパイナップルや、マンゴーがあるな。



でも、そのフルーツたちがどんな風に育っているかはあまり見る機会がない、今回はツッコミマンがみて驚いた変わったフルーツを紹介しよう。

その名も「ドラゴンフルーツ」中国語では火龍果 huǒ lóng guǒ ホウロンゴウと呼ばれてる。その名の通り、ドラゴンのうろこのような真っピンクの皮で覆われているフルーツだ。はじめて目撃したときは、目が飛び出そうになったぞ！！半分に割ると、白い中にゴマのようなフツフツが入っている果実の場合と、皮と同じく真っピンクの果実の2種類が台湾にはある。どうやら、メキシコには黄色い皮のドラゴンフルーツもあるみたいだ。



ツッコミマンはピンクの果実が大好きだから、白い果実があらわれると半分くらい楽しみが減ってしまうくらい悲しいんだ！！

そんなドラゴンフルーツ、どう木になっているのか？気になってしかたがない！と、思っていたところ友達の家になっているらしい。さっそく見に行くと、なんと！アロエのような茎にぶら下がっているのを発見。大きなピンクの実がいくつもいくつもぶら下がっていた！



どうやら、ドラゴンフルーツはサボテンの仲間のようにアロエのような茎もそれで納得。花のつぼみも同時に発見。若いうちならつぼみも薄くスライスしてサラダとして食べられるぞ。ねばねばしてちょっと硬めのオクラみたいな味だ。もし、果物屋さんに売っていたら君も食べてみよう！

『INCH の楽しい仲間たち』 vol.7 その 18

『冒険探検粉塵記 第 18 話 ヨーロッパの美しい村や街を訪ねて』

駄作者 文福洞先斗

ユーラシア大陸のアジア地域における雑穀の起源と伝播について 20 世紀後半に現地調査をしてきましたが、21 世紀に入った頃から、ヨーロッパ地域に出かけることが多くなりました。現職の頃の旅の目的は調査研究ばかりでしたので、退職したら家族のお供の者として観光旅行をする約束をしていました。個人旅行で、どこかの国の特定の街に一週間程度宿泊して、周辺の街や村を訪問していました。ところが、しばらくして老化のため体力も怪しくなり、またヨーロッパの社会不安も高まってきたので、大手旅行会社のツアーに参加することにしました。しっかり企画された 1 週間程度の広域旅程の中で、それでも密かに自分の興味に沿う事柄をなんとか見出しました。たとえば、マーケットでの雑穀販売、農耕地で雑穀の栽培状況や雑草の種類などを観察してきました。現地のマスター・ガイドの蘊蓄はさすがに面白いです。この数年間に、いくつかの国で美しい小さな村や街を訪問しました。そこで、日本の村々の有り様と比較してみようと思います。

テレビ・プログラムのドキュメンタリーで、イタリアの小さな村の物語を見て、いつも個人、家族、村人の人生における温かい暮らしが丁寧に描かれていて、心が安らかになります。誰の、どの家族の物語も苦難の時はあったし、今も苦労は絶えることはないのですが、個人の思い、家族の願い、村人の交わり、これらが暖かく語られて行きます。経済的に貧しいと言いながら、家内の調度は堅実に整頓しており、マンマの暖かい手調理が供され、子供たちは高等教育も受けています。大きな街で医師、料理人や技術者として良い職につけるのに、あるいはついているのに、相應の人々が生まれた村に戻り、自然に抱かれ、家族との穏やかな暮らしを受け継ぐことを選んでいきます。ヨーロッパ人の近代精神の自由と平等は個人の自律で、その個人こそが友愛に溢れ、これによって楽しい地域共同体社会が形成され、維持されているのでしょう。

そのように理解すると、ぼくはこの日本の国や村に欠如しているのは、個人の自律だと思うようになりました。自律していることは孤立していることではありません。もとより均質的な生き方でもありません。もちろん、自律するためには経済的自立が必要で、なんらかの職業や産業がなければなりません。日本の農山村では家族農業をしながら、他の仕事を兼業し、自然環境保全や伝統知継承、居住地・第一次産業従事者として直接支払制度の保障を権利として政策的認知を受けても良いと考えます。また、行政などから委託された度重なる地域調査の結果から可能性のある産業として、単なる観光業ではない複合的なエコスタディ・ツーリズムを提唱してきました。自然離れした都会人に自然の美しさや生業技能、伝統的知識体系を伝えることでいくらかのガイド収入が得られれば良いと思います。また今、ぼくはこの国に生業の自由や食料自給の権利を憲法で保障するように求めたいのです。幸福はそのままの美しい暮らしにあるのだと知れば、現代日本の貪欲な都市文明病は気候変動にも対応でき、改善するのだと思います。

イタリアの村： 2017 年に訪れた Civita 村は地震で道路が崩れた城塞都市（街）。三方が崖で、城塞を繋ぐ道路が壊れて孤立しました。現在は観光客が橋を歩いて訪れるようになっています。近隣の村では有機農業が熱心に行われているようですので、在来品種種子の自家採種などについて現地のマスター・ガイドさんに聞いてみました。 ※写真は次ページ



フランスで最も美しい村： 2014 年に、モン・サン・ミッシェルへと向かう途上で、立ち寄った美しい村 Beuvron-en-Auge は、街道沿いの小さな村で、素のままの美しい暮らしがあると感じ、とても気に入りました。広場を中心に小さなお店が並んでいます。観光客のために特段の何かをしているようには見えません。訪問時間が早かったのか、村に一軒あるパン屋さんも、大方のお店も閉まったままでしたので、ビジター・センターで Calvados（リンゴの蒸留酒）と Cidre の小瓶を土産に買いました。

2019 年にニースに行く途上で立ち寄った Roussillon 村、ここでは茶色系の絵の具になる土が採掘されるのです。地中海気候の林に赤茶色の露頭が現れているのはとても美しいです。丁度、写真の民家の壁の色のようなです。村では絵の具なども売っています。涼しくなったので、また絵描きを再開しようと、土絵の具の 8 色セットを買いました。丘陵の反対側には別の美しい Gordes 村もあります。

フランスで最も美しい村協会に認定されるには、人口が 2,000 人以下、文化財が 2 つ以上あること、美化に努めていることなどの条件があります。現在 156 の村が認定登録されています。



イギリスー美しい村： 2017 年に湖水地方やコッツウォルズに行きました。Chipping Camden ははちみつ色のライム・ストーンや茅葺で造られた家並みが美しく、Bibby はウィリアム・モリスがイギリスで一番美しい村と言ったように、何百年も続く家並みも家庭菜園もよく手入れされています。キツネノテブクロが美しく咲いていました。この景観を刺繍の題材にし、また電子書籍『環境学習原論』の表紙にしました。



ドイツ・ロマンティック街道： 2015 年に、ロマンティック街道でノイシュヴァンシュタイン城に向かう途上の Rothenburg は小さな村ではないのですが、中世 10 世紀以来の自由都市の街並みが美しいので、参考までに載せておきます。街道を訪問した証明書をもらうことが出来ました。

ポルトガルの一美しい街オビドス： 2019 年に行った Obidos は城壁に囲まれた小さな街(村)で、家並みを飾る花々が美しく、谷間の真珠と呼ばれています。白壁にシンボル・カラーの青と黄色のラインが映えます。



何百年も維持継承されてきた家並みが美しいのは、石造りだからでしょうか。木造では家並みを保存できないのでしょうか。よく見ると、ヨーロッパの家造りにも、木材が梁や床材によく使われており、すべて石で作られているわけではありません。耐火性に優れているとはいえ、不燃ではないようです。明るい色調の美しさも、地域の居住者の合意によって維持されているのでしょう。日本の村は良く言えばわび・さびの世界か、どうしてもくすんでいるように見えます。とはいえ、白川郷の景観は美しいです。

素のままの美しい静かな暮らしが維持されているところもあります。一方で、観光化、さらに商業主義が行きすぎて、訪問者が多すぎる、外部からの商品・商店にとって代わられる、など、居住者にとっては良いことばかりではないようです。観光受け入れの適正規模がどの程度か、適切な内容は何かなどの住民間の合意は必須でしょう。日本の村では、残念ながら容易に合意形成はできず、国からの直接支払保障や投資もあまりに少ないようです。山間地が多い日本では治水治水への対処も必要です。旧世紀の呪縛を解き、孤立したムラ社会や行政依存の態度は改めて、村民は自立した村づくりを意思すべきです。日本にも美しい村が維持されることを村人の努力はもとより、行政に対して社会的共通資本にたいする基盤的投資と政策実現を求めたいです。

「タイ環境学習キャンプ」特集～はじまってから 20 年⑫

今年も「タイ環境学習ツアー」が行われた。今回もこのツアーになくてはならないタイ在住の若林卓司さんの協力で有意義なツアーが実施できた。この場を借りてお礼申し上げたい。さらに、9 月末に頼もうとしていた原稿が送られてきた。なんということか。小菅村での INCH まつりでギター抱えて歌っていたときに願っていたことが、家に帰ってパソコンを開いたら現実になったのだ。願ってみるものである。

今年も 8 月 9 日昼ごろに成田を発ち、夕方 6 時半ごろバンコクに着いた。チナタッタさんが出迎えてくれて、いつものラジャバト・プラナコーン大学内にあるプラナコーン・グランドビューホテルまで送ってくれた。夕食は？まだ。ということで近くのレストランへ連れて行ってくれ一緒にビール片手に夕食となった。いつものうれしい接待を受けた。

翌日、10:00 にチャトチャ公園で若林夫妻と待ち合わせ。フロントにホテル開設当時からいる今では顔見知りとなった彼に(名前は知らないのだが、彼の妹さんもこのホテルに勤務している)タクシーを呼んでもらい 3 人で向かった。

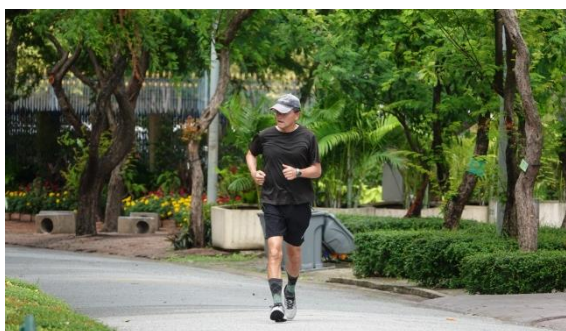
ここから先は、若林さんの含蓄のある文になる。日記という形を借りて、事実に基づいた随筆である。尚、文中の写真は私が撮影したもので、私の主観で適当に入れてある。(中込卓男)

「タイ環境学習ツアー 2019」 その①

若林 卓司 日記から

8月10日

ゴミ、ゴメ、ゴウの三人がチャトチャ公園の待ち合わせの場所に来たとポンティップから電話があったとき、私は 5 キロを走り終わり、例の運動公園で腕力トレーニングをしているときだった。それを済まして約束の場所に行くと、いない。元の場所まで戻ると、すでにいた。



▲ジョギングを日常欠かさない若林さん

今日はシリキット公園でのタイの母の日のイベントに行くことにしていたが、まずはロットファイ公園のフクロウを案内した。いつもいる二か所にちゃんといてくれたので、写真も撮ることが出来た。巣穴から顔を出したインドコキンメフクロウはなかなか愛嬌のある顔をしていると思う。



その後、シリキット公園へ行ったが、去年に比べて、店も少なく、展示も精彩を欠いていたように思うが、試食試飲が多かったので、3 人には楽しんでもらえただろう。ダーラーの花から作った飲み物、靈芝を煎じたもの、山岳民族のコーヒー等。



次に JJ モールへ行って、ペッチャブーンの特産品展を冷やかした。この県の特産品はタマリンドである。ゴメさんとポンティップがそのタマリンドの加工品を買っていた。

腹が減って来たので、私たちがよく行く店に行つて、昼を食べ、さらにロート・ションの店に行つてデザートを食べた。このデザートは 3 人とも気に入ったようだ。



▲込み合っている人気店。左から剛くん、ゴミさん、手前が若林さんの奥さん A さん



ロート・ション

それからさらに、オートコーへ行った。ここでもゴミさんはパクチーの種を買っていた。

夕方チンナタット先生と約束があるという 3 人とチャトチャのマーケットのバス停でわかれ、私たちはバスに乗って駐車場に戻り、コンドーに帰った。

剛くんが少々お腹を壊しているようなので、のんびりホテルで過ごし、18:00 にホテルでチナタッタさんと合流していつもの「タウンデーン・シャーマン・ブリュワリー」というビアホールに行った。剛君はホテルで休むことにした。



ウタイタニーのジャングルから帰って帰国直前にこのビアホールで飲むことが多いが、今回は日程的に旅の始まりである。それとは関係なく 3 リットルのピアタワーをたて 3 人で飲みほした。旅の始まりを祝う宴であった。

ウタイタニー 2019

8 月 11 日

9 時過ぎにタクシーでプラナコーンまで行き、その食堂で朝ご飯を食べた。ホテルで 3 人に会って、そうこうしているうちにバンでポータンさんとパンダが迎えに来た。ウタイタニーに向けて出発である。いつものようにスパンブリーのロータスで買い物。ゴミさんのする理科遊び用の材料を買い、毎年恒例のサンダル買いも済ませたが、ビールは時間制限があって、自主的に買うのをあきらめた。

ポータンさんがダーンチャーンに美味しい魚料理の店があるというので、そこで食べることになったが、ここにはダム湖があるというので、まず、そちらへ先に行った。こんなところにダムがあるとは知らなかったが、バンの運転手も初めてだといっていた。



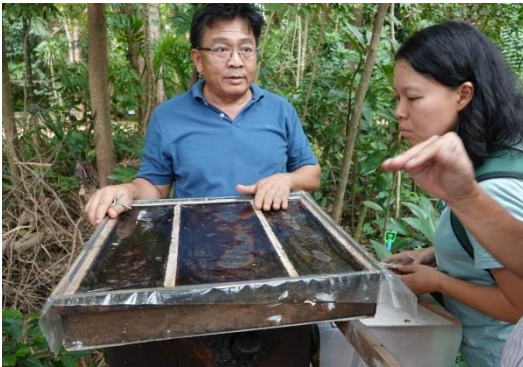
クラ・シアオダムといって、開放的な風景が楽しめるところだった。湖上に筏が浮いており、その上に小屋があるのは昼夜で魚を取るらしい。

昼は「オートボーデン」という店で食べた。しゃれた感じの店で、細い路地を奥に入ったところにあって、思わず「注文の多い料理店」のいい店は大通りに面したところにはないというような文面を思い出した。

プラー・サリット、プラー・タップティムの魚料

理はおいしかったが、デザートに出たロート・ションもなかなかいける味だった。

バーン・ライの町で大量のビールを買って、パンダキャンプに着いたのは 4 時ごろになった。途中何度か強い雨に出会ったが、雨はすっかり上がった。シリポンさんとは何度も電話で話しているが、キーさん、イエンさん、ノーイさんも元気だった。また、カンペンセーンにあるカセサート大学で勉強しているダン（デン）も帰っていた。さっそく、シリポンさんがハリナシバチの巣を案内してくれた。



▲ハリナシバチの巣を見せるシリポンさん

8 種、50 ほどの巣があるといっていたが、ここ 1 年のうちによくそこまでしたなと思った。

夕食は料理上手のキー・イエンのコンビが作ったもので、毎年楽しみの一つである。



▲パンダキャンプでの食事。この料理を食べるためにまた来たいという人もいる

コーヒーを飲んでしていると、シリポンさんがハリナシバチの花粉、プロポリスを入れてくれるので、何を飲んでいるのか分からなくなるほどのありがたい味になった。

その夜は遅くまで話したが、いろいろ話したので、どんな話をしたか忘れてしまった。シリポンさんの

ハリナシバチの話やノーイさんのこの頃、果樹を食べにくるコウモリをカスミ網で捕まえるようになったが、鳥も一緒に捕まるので、それらを食べることがこの辺りで一種の流行になっているという話などだったと思う。

8月12日

朝、パンダキャンプの中を鳥を探して歩いたが、去年のようにミナミヤイロチョウにはお目にかからなかった。昨日からアカハラシキチョウの見事な歌声を聞いていたが、今朝もいい声を聞かせてくれた。

朝はシリポンさんがハリナシバチの中でも大型の *Genio trigona thoracica* の蜜を、最近買った機械で吸い出すというのでついていった。ダンが機械を操って、少し吸蜜が出来た。



飲ませてもらうと、それほど酸っぱくなかった。シリポンさんによれば、種によっては酸っぱいばかりじゃないそうだ。

そんな話をしているうちに、ノーイさんがカスミ網で取ったものを持って来た。



問題の果物食の何匹かの小型のコウモリその他、ミドリサトウチョウ二羽（死んでいた）、ヨーロッパコノハズク 2 羽。



ノーイさんがコノハズクを私に渡すので、私は両手に一羽ずつ持つことになり、記念に写真を撮ってもらった。ポンティップもそうしてもらったが、コノハズクは生きているので、逃がすようにノーイさんに強くいった。1羽はすぐに飛び去ったが、後の1羽は飛べず、下に落ちたり、ノーイさんが上に放り上げたりして、長くパンダキャンプにいたが、暗くなったら飛び立つとノーイさんが言うように、実際そのようになった。

この日の朝はこのようにざわざわしていたが、一番重要なワークショップのある日だ。もう学生が来出していた。

朝のスケジュールはゴメさんの番である。学生は小学校の高学年。今日は祝日なので、学生が集まるかどうかわからなかったのが、いろんな人をお願いしたら、結局 60 人を超えることになったという。これにビビったのがゴメさんだったが、心の整理をし、勇ましく課題に立ち向かった。

最初はボール紙と輪ゴムを使った跳躍の遊び。次はアイスクリーム作り。ここで休憩が入り、最後はスライム作り。



ゴメさんの理科遊びは、ガラス玉を使った顕微鏡のように、ウタイタニーに限らず、他県にも広まったものもあるが、普通は何でもない遊びをやって、それでいてすごく子供を引き付けるものである。子供の真剣な顔、成功したときの嬉しそうな顔、それを見ているだけでも意味があると思う。

今回は学生の数が多いので、日本人一行、シリボン家、私ら二人総出で実験の手伝いをした。この日はパンダキャンプによく泊りに来るという、バンコクで働いている大島さんとタイ人の奥さんも来られていて、一緒に手伝ってもらった。

あわただしい昼を済まし、全員で記念写真を撮った。



昼からはゴミさんの陸稲の話である。参加者は 15 人ほどいただろう。前日、日本の陸稲の状況がどういふものかゴミさんから聞いていたので、コンピューターの調整中に、簡単に訳して話した。タイ人も陸稲はあまり食べないようだが、カレン族やほかの民族では重要な位置を占めている。



今回のゴミさんの取材も去年のように丁寧なものだった。陸稲を作っている人を探し当て、インタビューしたり、貴重なモミを入手したり、陸稲を使ったおかきの会社を訪ねたりしている。

日本人はもう誰も陸稲を食べてはいないようだが、戦前には陸稲栽培が奨励されていたという事実も突き止めている。

なかなか興味ある話が続いたが、ゴミさんには申し訳なかったが、上手く訳せないところがあった。

結局日本人は現在陸稲を食べていないので、さまざまな製品を持ってくるわけにもいかず、陸稲を使ったおかきは食べてもらったが、日本の陸稲はモチなので、赤飯を作ったり、お汁粉を作ったりして、参加者に日本のモチを使った食べ物を味わってもらった。

ワークショップが終わってから、参加者の一人タヌさんの「足るを知る農場」に行くことになった。私たちだけでなく、参加した人、大島夫婦も一緒だった。そこまではパンダキャンプから南の方向にちょっとあった。

池を中心に野菜や果樹、水稻（水が枯れてくれば陸稲）が植えてあり、池にはナマズやテラピアを養殖し、アヒルも飼ってあった。

私たちは魚釣りをさせてもらった。釣れるのはナマズだったが、ゴミさんのみテラピアを 2 匹釣り上げた。



▲ナマズを釣り上げた喜びの 2 人。左から剛くん、ゴミさん、シリボンさん。

タヌさんにこれが「チャオム」と説明してもらったときはこれがそうかと思った。大学の学食で、この葉を混ぜたタイ風の卵焼きをよく注文するのだが、葉を口に含むと香ばしいにおいがして、料理を作るために素材を組み合わせるタイ人の味覚に素晴らしいものを感じた。

タヌさんはバンコクで 13 年タクシードライバーをして、ここにきて 9 年になるといっていた。



ポンティップはパンダキャンプに残っていたが、電話をしてきて、今ひどい雨が降っていると知らせてきた。30 分ほどして、こちらもひどい雨に見舞

われたが、この農場は橋の下から別の方角に伸びているので、その橋の下で雨宿りをした。

この機会にあまり話が出来なかった、これからバンコクへ帰るという大島さんと話した。

足るを知る農場での収穫物は欲しい人にただであげているというので、私たちも魚をもらって帰ったが、どこへいったのか食卓には出なかった。

しかし、その夕食の前にコウモリの揚げ物が出た。今朝、ノーイさんが持って来ていたやつだ。その時、ちらっと顔を見たが、まだ生きていて顔が犬のようで、なかなかかわいい顔をしていたが、こんなことになってしまった。

卓に出てきたからには、食べないわけにはいかないが、誰が食べるかといえば、去年、タランチュラのようなクモを食べた人たちになる。剛くんも私もただあっけにとられて見ていただけだった。



この日の夕食もおいしいものだった。タヌさんもいたし、昔、シリボンさんと一緒だった職業学校の先生、トゥー先生一家もいた。

その夜も 11 時過ぎまでワイワイ話をしていましたが、結局何を話したのか忘れてしまった。しかし、このワイワイが楽しいのである。

8月13日

今日から二泊の予定でフーワイカーケーン野生動物保護区である。シリボンさんの運転するピックアップ・トラックの荷台にはノーイさん、剛くん、それに氷詰め金の虎の子ビールが乗った。

ちょっと、シャワーが来た。しかし、ちょっとでよかった。

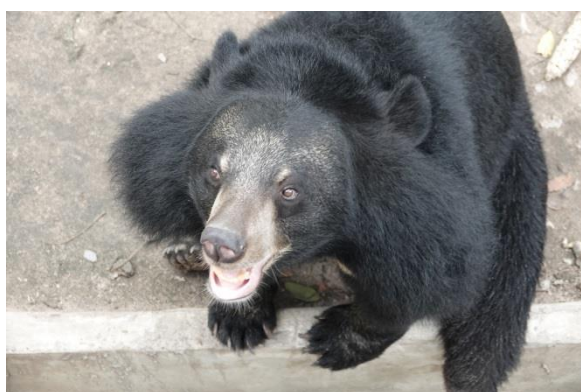
最初に保護区内にある飼育センターへ行った。ここには復帰して森に帰るのを待っている動物もい

るし、それが出来ず、ここで飼われている動物もいる。

ここへはずっと前一度来たことがあるが、相変わらず受付もなく、不愛想なことこの上なかったが、シリポンさんが事務所に声掛けをしたら、このセンターの人が案内に出てこられた。



最初に案内してもらったのがマレーグマの檻。子供の時、人に飼われていたのをここが引き取って育てているという。



私を引き付けたのはうすくまってひっそりいた Leopard cat だった。タイにはトラやヒョウをはじめ、野生のネコ科の動物は 9 種類いるが、このネコは其中で一番小さく、家ネコとそれほど変わらないという。



案内の人の後をだらだら追っていたら、目の前の看板の上にカササギサイチョウが止まっていた。まるで人形のようなだった。



次は少し離れた木にオオサイチョウ。向かいにセンターの動物に食事を提供する台所のようなところがあり、どうも何かをつまみ食いに来ているのだ。



オオサイチョウはコソ泥をしていますが、間近で見れば威厳があり、風格がある。しかしそれよりも正面からその飛翔の羽の一連の動きを見れば、その美しさに魅せられてしまう。

私たちは酔ったようにトラの檻に移った。特別地域のように、電線線のプラグを抜いてから、二重の門を開けて中に入った。

ここにはベンガルトラが 1 匹とタイのトラが 3 匹いる。このサイトで有名なクロン・コーとメスのナパーをカップルにしようと隣り合わせの檻に放しているが、まだ成功はしていないようだ。

動物園と違って、金網を隔てて顔を突き合わせるほど近づけるので、トラの息遣いも迫力がある。



その後、ヤマアラシを経て、遠くに白っぽいテナガザルのいるところに行った。

この個体はメスだそうで、一度配偶者選びに失敗したのだが、どこからか二度目の機会が訪れるように、敷地の外れにある、回りを水に取り囲まれた島のような所にある木に放されていた。



センターの人の話で、9 年前にここの保護区で保護されたと聞いたとき、私たちは昔、子供のテナガザルを抱かしてもらったことを思い出した。あの時のテナガザルなのだ。体に抱きついてきたときの感触が蘇ってくるようだった。



▲テナガザルの赤ちゃんをだっこする若林さん
(2010年 フーワイカーケーンにて)

その後遠くのもの陰でタイ語でリエン・パーと呼んでいるカモシカの仲間の姿も見た。他にもスア・ファイと呼んでいる Asian golden cat もいるそうだが、それは見せてもらえなかった。残念だった

が、これでも十分なものを見たと思った。

宿泊所に着いたのが 1 時を回っていた。昼を食べていないので、どうするのだろうかと思っていたら、シリポンさんの交渉上手で、川のほとりの食堂で食べられることになった。

食堂の近くの木に大型のトカゲがいるのを誰かが見つけた。さっそく、カメラの集中砲火を浴びせたが、タイ語でタクワットと呼んでいる陸生のトカゲで、1 メートルは優に超える大きさだ。



そうこうしているうちに天候が崩れてきた。食堂の屋根の下にいと、川沿いに少し大きめのカワセミ、コウハシショウビンが飛んできたので、一旦は何もかもそっちのけの状態、この鳥にかかりっきりになった。



食後の予定は野生動物の観察塔。ここの職員のリンさんに今年も案内してもらった。今回は行った時間が遅かったので、時間延長してもらって 5 時半ごろまでいたが、クジャク以外には陸上動物はイノシシー頭だけだった。

イノシシは悠然と歩いていたので、カメラの被写体が欲しい私たちは、仕方なく撮るより方法がなかった。



しかし、距離はあったが枯れ木に止まった 2 羽のハト、キアシオバト（Yellow-footed Pigeon）は後で調べてみると、簡単にはお目にかかれない鳥だった。



リンさんの指摘がなかったら、私たちの初めての鳥にはならなかったかもしれない。



▲観察塔 ブラインドから観察。写真撮影。

帰りは両側の森に注意しながら帰る。サンバーティアー、ホエジカが顔を見せた。



川辺の食堂で夕食を食べ、宿泊所に戻る。宿泊所は二部屋あったが、私たちに一部屋あてがってもらったのは大変ありがたく、又心苦しかったが、後に起こったことを思うとこれでよかったとも思った。

例によって何人かは浴びるほどビールを飲みながら、玄関にあるテラスでよもやま話を続けた。



以前、ノイさんがジャコウネコをおびき寄せて、我々に写真を取らせてくれたが、いつ餌に来たかを知らせるため、ビール缶を数珠つなぎにして、餌につけてくれた。今回も同じ試みをしたが、ほとんど鳴らず、少し鳴っても起きていこうという気にもならず、情熱の冷めやすい世の常の心の実感した。

夜は電気が止まってしまうが、窓を開けていれば、涼しいぐらいで、十分寝ることが出来た。



▲食堂 川沿いで鳥や動物等の観察ポイントでもある

『藤農便り』 第 19 号

宮本茶園 ヘルミッショネルズ宮本

夏の終わりに腰痛と痛風を患い、医者通いをしました。腰痛は初めてですが、痛風は毎日ビールを飲んでいた 40 代半ばに発症した事があります。佐藤先輩から「足指の痛さは半端でないぞ」と脅かされていましたが、発作時は全く歩けない苦しさでした。佐藤さんが「炭粉を飲むと尿酸を体外に排出してくれる」と教えてくれたので、家で晩酌を止め毎朝スプーン 1 杯の炭粉を飲む事が習慣になり今日に至っています。久し振りの発作に整形外科で血液検査を受けましたが、尿酸値は全く正常です。「猛暑で大量の汗をかいて血液が濃くなり、尿酸結晶が足指関節に溜まったのでしょう。水をたくさん飲んで涼くなれば自然に治りますよ」という診察でした。医師の言葉通り秋になると痛みはなくなりました。佐藤先輩直伝の炭粉療法、痛風で苦しんでいる方にお薦めします！

今年は遅霜・長梅雨・猛暑・台風・野生動物食害と佐野川の農家にとって厳しい年でしたが、前向きな気持ちで晴耕雨ネトの生活を続けています。先日 Yahoo! の動画アプリ GYAO! で「種まく旅人～みのりの茶～」が配信されました。茶農家になった頃 YouTube で観た映画で、主人公の若い女性が父の故郷大分県を訪ね、茶農家の祖父が病に倒れた行き掛かりで茶畑を管理する羽目になり、後継ぎに成長するという物語です。作中で描かれる有機栽培の取り組みが就農一年目の苦労と重なり、孫娘ができて宮本茶園と一緒に営みたいというささやかな夢を持つようになりました。LINE つながりの友人たちに鑑賞をお薦めしましたが、私の夢伝わりましたか？

・台風 19 号被災

千葉県を中心に大きな被害を出した 9 月の台風 15 号に引き続き、10 月 12 日台風 19 号が日本に上陸しました。発生直後から猛烈な勢力に発達した台風は東日本を縦断し、各地に甚大な被害をもたらしました。連日マスコミ報道されたように相模原市緑区では大規模な土砂崩れや河川の氾濫があり、尊い人命が失われています。

台風接近に伴い 11 日は朝から大雨でアルバイ

ト先の小学校は登校児童保護者引き渡しで、児童クラブは職員待機になりました。全利用児童が帰宅して 18 時勤務終了、スーパーで数日分の食料を買い込んで遅ればせながら防災準備をしました。12 日早朝より市の防災放送や広報車が避難を呼びかけていましたが、自宅雨戸を閉めて危機感もなくのんびりと連日の農作業で疲れた体を休めていました。台風上陸時刻が近づくにつれ風雨が強まっても、近隣で大災害が起きているという自覚のないまいつも通り就寝したのでした。

13 日朝は台風一過の穏やかな日和、暴風雨の中配達された朝刊やネットニュースを見て台風被災の重大さを実感、最初に頭に浮かんだのは藤野茶業部の茶園被害把握でした。佐野川に向かう道路は側溝からあふれ出た水が流れ冠水箇所もあり、周辺の山はいたる所に大規模崩落があり車両通行できない地区もありました。栃谷・和田・上岩と巡りましたが先人たちがていねいに石を組んで築いた各部員の茶園は崩れた箇所はなく、事務局と木村普及員に状況報告して家に戻りました。自分の目で確認した佐野川は和田地区の被災が深刻で、ネットで発信される情報で自宅からそう遠くない牧野地区では死傷者が起きている事を知りました。



連休明け 15 日からしばらくの間は中央本線・中央高速道が全面不通、山間部生活道路も各所で寸断

され通行止め、津久井の国道・県道は大渋滞でした。自宅が被災し避難所暮らしを強いられた方も多く、今なお不便な日常生活の続く地区が残っています。復興作業に取り組む藤野では地域住民が助け合い、ネットを利用して必要物資や支援ボランティア要請等の情報交換をしています。ピオ市事務局からは参加農家へ炊き出し食材提供や土砂かきだし作業参加の呼びかけがあり、避難所へ食材代わりに佐野川茶を届けさせていただきました。私の安否を気遣いご連絡くださった方々ありがとうございました。紙面をお借りしてお礼申し上げます。

・INCH まつりと成合会

日没が早くなり畑仕事が忙しい秋の季節、佐野川から出る機会が少ない私の楽しみは INCH まつりと成合会です。学大サークル長屋でかけがえのない時間を共に過ごした仲間や先輩・後輩、INCH 活動を通して知り合った方々と旧交を暖められるとても大切な催しです。

運営委員会メールに中込ミ君が「INCH ライブに学大卒の吉本有里というミュージシャンを呼びました」と書き込みました。新聞会の吉本さんはサークル長屋でお付き合いのあった方で、「よいしょバンド」というグループを組み演奏活動をしていました。80 年代の学大社会科学系サークルは、互いの活動や研究テーマを共に学ぶ「解放講座」という自主ゼミを企画していました。各サークルは三里塚闘争、狭山事件や被差別部落、養護学校義務化や障害者差別、光州事件・在日朝鮮人差別や朝鮮大学校との交流等々、学校の授業では教えられなかった様々な社会問題をテーマにレポートや講演会を行っていました。尊敬する北村小夜先輩と出会ったのは特殊教育研究部で企画した講演会でしたし、解放講座で学んだ事は学大卒業後の私の生き方に大きな影響を与えてくれました。

久しぶりに再会した吉本さんはかつての小金井祭ステージと変わらない透き通った歌声でライブを盛り上げ、中込ミ君と 3 人で思い出話を花を咲かせました。学大卒業後は教員にならずプロミュージシャンを目指し、努力して夢をかなえた吉本さんの言葉は駆け出し農家の私を励ましてくれました。特教研仲間に「よいしょバンドの有里ちゃんと再会した！」と写真添付でメールしたところ、「みんな

若い！」と返信がありました。



10 月最終土曜日の夜は日暮里で成合会、今年で 36 回目になりました。成合君は中込メ先輩たちが卒業して部員のいなくなった探検部を再建したメンバーの一人で、今は東久留米国際学生宿舍となった雄連寮に入っていました。当時の雄連寮は特教研部長の恩田君が寮長で遊びに行く機会が多く、私は寮生の成合君や河口君と親しくなって探検部に掛け持ち入部したのです。成合君は卒業後寮祭へ向かう道中で交通事故に遭い突然私たちの前からいなくなったのですが、亡くなる前日部室に残した「探検部頑張れ」は当時を知る仲間の心に刻まれました。葬儀の翌年から命日に近い 10 月最終土曜日の夜は菩提寺のある日暮里駅に集合して、墓参後に宴会を開くのが恒例になりました。今年は 8 人が集まり親交を深めましたが、冒険探検部廃部が話題になりました。還暦・定年退職を迎える古参部員にとって、寂しさはありますが皆楽天的に受け止めています。木俣師が植物と人々の博物館メルマガ 60 号に書かれた「いずれまた復活すればよいのです」が成合会参加者の願いです。



・秋の茶仕事

昨年雑草に覆い尽くされた再生茶園は、腰痛・痛風という代価を払いましたが除草剤を使うことなく雑草との闘いに勝利することができました。「石の上にも三年」のことわざ通り、努力は必ず報われ

ると確信しています。9 月藤野茶業部会では茶園に与える肥料について話し合わせ、「農協が斡旋する茶配合や菜種粕等有機肥料は高価で、規定通り購入・施肥したのでは利益が出ない」と意見が出されました。木村普及員は「秋肥は 1 反当り 15 kg の窒素が入れば十分です。成分計算し値段を考えて肥料を購入してください」と指導されました。私の春・秋肥料購入代金は、残念ながら足柄茶販売金額を上回って赤字経営です。今年の秋肥は指導を参考に購入、3 週間かけ 6 反の茶園全てに施肥・中耕作業を行いました。

10 月 8 日茶園巡回と製枝講習会、木村普及員より「秋整枝のみでいきしましょう」・「秋整枝でここまで刈り込み、春整枝で整え収穫しましょう」・「急がず春整枝だけでよいでしょう」と茶園毎に的確なアドバイスがありました。



併せて第 52 回神奈川県茶園共進会の佐野川地区出品茶園選考があり、上岩で昨年から更新に取り組んでいる私の茶園が出品される事になりました。1 月の第 51 回神奈川県茶業振興大会で小池さんの茶園が 2 等表彰されたので、後に続けるよう木村普及員・大河原部長の指導の下でいねいな整枝作業に取り組みました。出品茶園用に部員・事務局が集めてくれたワラを畝間に敷き詰め、枯れ枝や整枝機械で飛び散った葉を取り除く作業を審査直前まで行いましたが、久しぶりの高校・大学受験をした時のような緊張感を持ちました。11 月 13 日審査が行われ、今は合格発表を待つ受験生の心境です。審

査結果は次号でご報告します。



・雑穀栽培普及会活動

初収穫の小麦は 9 月になって四方津にある JA クレイン大目支店で製粉しうどん粉・パン用粉・フスマに加工、全量土屋商店に卸しました。10 月には津久井在来大豆・借金なし大豆の枝豆を収穫販売、農業所得向上に努めました。1 反全てに作付けした雑穀畑は甲州モロコシを猿軍団に横取りされた以外は順調に生育し、稔りの季節を迎えました。昨年同様お盆過ぎに防鳥ネットを張って雀の襲撃に備えたモチキビは、20mm 網目をすり抜けて侵入する雀軍団の猛攻と刈り取り後に猿軍団の襲撃を受け散々でしたが、1.7kg 収穫できました。隣に植えたモチアワは雀もそれほど食せず、たわわな穂を垂れていたのが昨年以上の収量を期待していました。

10 月 27 日、茶業部員の整枝作業を手伝い上野原で昼食をとっていると、隣畑の方が「猪が入って畑は大変な事になっているぞ」と教えてくれました。午後の整枝作業を終え機械を片付けて雑穀畑に駆け付けると想像以上に酷い状況で、憎き猪軍団は針金で止めていた防護柵扉をこじ開けて畑に侵入したのです。実入りした大豆は食い散らかされ、モチアワは防鳥ネットがズタズタに引き裂かれ一つ残らず穂が無くなっています。



襲撃は 3 日間続き、防護柵扉は太い針金で締め
て固定し人間も出入りできなくしました。29 日朝
田村さんの茶畑に仕掛けられた括り罠に若い猪が
かかり、仕留められました。ライフル銃で足を砕か
れ最期は撲殺されたという猪の屍を見て、中山間地

農業は野生動物と死闘する覚悟がないと続けられ
ないのだと実感しました。猟師さんの括り罠設置を
見学しましたが、何故か青春時代に読んだ本多勝一
「戦場の村」を思い出し南ベトナム解放民族戦線ゲ
リラ戦士がアメリカ侵略軍に立ち向かう光景を重
ね合わせました。



* 興味ある方はヘル宮本までご連絡ください。
Tel: 090-2205-8476 (宮本透)

ちょこっとコラム～日々楽しく暮らしているはこの日常～

みなさんこんにちは。ご無沙汰しておりますはるこです。なんと小菅村に住み始めてもうすぐ 13 年目を迎えようとしています。「山に住むの?」「田舎暮らし?」「自給自足?」と今までも(なんなら今でも)散々言われ続けておりますが日々楽しくノンストレスでのびのびと過ごしています。

この夏に子を産みまして現在育休の真っ最中なわけですが、連日『お散歩』と称してきのこ採りに出かけています。とは言っても生後数か月の赤ちゃんを抱っこしながらなのでハードな所へは行かず、基本的にのんびり歩きながら採る程度。採れたきのこはご近所の小菅村物産館に出して、この秋だけで 1 万円を優に超える売り上げがありました。なんとてれてれお散歩しながらおむつ代が稼げてしまったのです。どうだ羨ましかろう。

そうそう、この季節大根や白菜がとても美味しいですね。毎日毎日食べていますがなかなか減りません。なぜって?たくさんいただいているからです。今日も玄関に白菜が 2 玉。名もわからぬごんぎつねさん(たぶん二軒先のおばさん)にいただきました。小菅のお野菜は基本無農薬栽培なので嬉しい限り。ちなみに今夜は麻婆白菜です。育休中、子育て大変だから…と言われていましたが我が家は常時 2 オペなので毎日が日曜日みたい。明日はどこへお散歩に行こうかな。



『INCH の楽しい仲間たち』 vol.8 その 9

ニュージーランドで湯治（その 3）

佐伯 順弘（岐阜県）

オークランドでニュージーランドに初上陸し、ファンガレイで巨大樹木カウリに挨拶した後、ロトルアへと移動した。そのロトルアでは本来の目的である湯治を果たした。というか、巨大なスパランドでただ数時間のんびりした。そして、旅は折り返し、オークランドへ向かうのであった。



DAY6（13AUG2013）ロトルア→オークランド

0730 起床、コーヒーと小さなパン1つだけの朝食、シャワーなど身支度は素早い。



出発の準備も素早く整えるが、つい「乗鞍青年の

家」仕込みの整頓をしてしまう。来た時よりも美しくが基本である。（別にユースホステルはそれを要求しているわけではない。単なる個人的な習性である。そうしないと、どうにも気分がよくないだけである。本来はピローカバー、シーツも外して、リネン室にもっていく。）

さらば、ロトルア YH。期待通り快適な YH だった。すぐ、バスターミナルに向かい、バスチケットを入手する。当然、時刻表など調べていない、行き当たりばったりのスケジュールである。それはスケジュールと呼ばないのではないかという指摘は無視させてもらう。これが私のスタイルなのである。当然、旅仲間もそれに巻き込まれることになるが、彼もこういうことには動じないので全く問題はない。我々は予定をこなしているのではなく、旅をしているのだ。



（観光案内所兼バスターミナル。足湯もある。）

0920 バスチケットを入手。ロトルア→オークランド 29NZ\$。出発まで時間があつたのと、朝食がやや少なかつたため、近くのロックダネルに入る。ピエロがいるバーガー屋である。



チーズスコーン+フラットホワイト(M) 5.8NZ\$。
さっき食べたのと変わらないじゃないかと言われ
そうだが、別に同じでも全く問題はないのである。
食べたいのだから、健康にいいのである。食べたい
ものを食べたいときに食べるという、欲望に身を任
せる生活も旅の醍醐味である。ここは、ロックダネ
ルにしてはうまかったので、なんだか優しい気持ち
になった。



その後、ポストオフィスで絵葉書を書き、投函。
どの国のポストも日本と同じ赤ではないのだが、こ
このポストは赤い。今までの旅で見たのは、赤、青、
黄、緑である。きっと他にもあるに違いない。でも、
たぶん原色目立つ系の色であることは想像に難く
ない。そんなことを愚考した後、YH 周辺を散策し
尽くし、空腹を感じた頃、ふと時計を見ると昼飯時
である。



偶然、目の前にあったのが、多くの国でオレ御用
達のバーキン（BurgerKING）である。Meal
9.1NZ\$。朝食、昼食とジャンクフード連続でも全
く問題ない。世界で覇権を争うジャンクフード業界
の勢力分布とその品質を見極めんとする探究心か
らの行動である。さて、やっとバスの出発時間が近
づいたのでバス停へ。



1310 バスはオークランドに向けて出発。下手に
起きていくといくら快適な海外のバスだとは言え
乗り物酔いする可能性もあるので、寝る。

1710 バスはオークランドに到着。



1730 Surf&Snow というユーミンの曲みたい
なバックパッカーズインに落ち着く。今までの宿と
比べると圧倒的に騒がしく、落ち着かない。落ち着
くのか落ち着かないのかどっちなんだ！と正確な
ところを問いただされても、そんな気がするといか
言えない。何かが警報を鳴らしているのだ。オー
klandは大きな都市だから、騒がしくて当然かも。
しかし、東京のビジネスホテルは静かで落ち着く。
新宿区役所前カプセルホテルでも静かで落ち着く。
この宿の妙な騒がしさ、落ち着かなさの原因は後々
わかってことになる。それはそうと、夕方であ
る。夕食の時間である。共同キッチンもついている。
となれば、街の散策を兼ねてニュージーランドビー
フの買い出しである。



酒と言えば、基本属性はウィスキー派なのだがワ

インも日本酒もビールもウオッカもジンも焼酎も嫌いではない、いや好きである。今回はニュージーランド産のワインも買ってみた。もちろんチーズと冷凍のミックスペジタブルも。

共同のダイニングキッチンに行き、宿に到着してから感じていた違和感の理由がわかってしまった。日本人がたくさんいる。しかも、ここでバイトしている集団が。自己管理ができそうにない雰囲気を出し、傍若無人な様子で騒いでいる。日本人は徒党を組むと途端に下品になる。訪問者であることを忘れてしまうらしい。こういう輩が日本代表だと思われるのは甚だ不本意だが、いくら教師と云えど、ここで説教などするはずはない。彼らを視界に入れないようにして、ワインを2本空けた後、夜のオークランドを散策。寒いことは寒いがなんかぬるい寒さであり、全く冬らしくない。



なんか、タワーってどこでもあるなぁと見上げる。ライトアップがいい感じである。



こういう店もある。カラオケパブ迎賓館なのかラーメン一番なのか、どっちなんだ！とことでカラオケと云えば、それは世界制覇したと言えるのだろうか。ま、どうでもいいことだが。

DAY7 (14AUG2013) オークランド滞在

0700 起床。

1000 スカイジャンプ。

スカイジャンプである。スカイジャンプとは何ぞ

や。それは昨夜見上げたタワーからロープで宙吊りになって降りてくるというアトラクションである。もちろん、いい感じでブレーキがかかっているのが無事地上に降り立つことができるのだが、とても正気の沙汰とは思えない。



パキスタンの 5000m 峰に登るほどの私ではあるが（自慢にならないがちょっと自慢）、それは大地に足がついていてこそであり、ロープで宙吊りなど考えただけでキュッとしてしまう。しかし、旅仲間は喜んで跳んだ。そう、人の趣味嗜好は様々である。だからこそ、面白い。恍惚に包まれた表情を浮かべる彼に対して、惜しめない拍手を送ったのは言うまでもない。

1210 オークランド戦争博物館



へらへらしているが、戦争博物館は甘いものではなかった。現代の感覚であの当時を判断することはできないのだが、その記憶をどう展示するかは考えられるべきである。正しい、間違っているではなく、これからの我々の行動にどう生かすかを考えるべきである。そんな思いで見学した。ニュージーランドの人々、特に学生たちはどのような思いでこれらの展示を見たのだろう。一方、日本にはこういった

展示がどれだけあるのだろう。そして、それにどれだけの学生が足を運ぶのだろう。善悪ではなく、事実を知り、それをもとに何をなすべきかを考えるという活動をしているのだろうか。



日本のゼロ戦や英国のスピットファイヤーが展示されていた。なぜここにこれが置いてあるのかわからない。自分の不勉強さを恥じる。その他にも日本軍の火炮などが展示されていた。

1700 部屋に戻り、暫し休息。心が疲れた。

1740 夕食へ。少しはレストランにも行こう、海の幸も食べようということで、出かける。



ビール、ムール貝、生ガキ、フライドポテト。

特に生ガキがうまい。旅仲間は当たるのが怖いと回避。一人だけでおいしくいただいた。スコットランドでも生ガキ食べまくったけれど、大丈夫だった。当たったことがあるのは日本のすし屋でマテ貝を食べて当たったくらい。牡蠣では当たったことはないのだ。もちろん、体調がいいときしか食べないけ

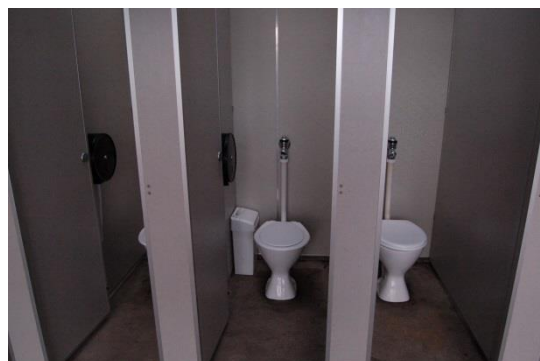
れど。確かに旅先で当たったら大変なことになるだろうが・・・。

DAY8 (15AUG2013) オークランド滞在

昨日の博物館をやや引きずっている。敗戦記念日である。昨夜食堂で、一人旅の男からランギトト島というところが良いという情報を得て、急遽そっち方面に舵を切る。0915 フェリー28NZ\$。溶岩でできたむき出しの火山島。少しずつ植物が生えて緑の島になっていく様子を巨大な博物館のように展示してある。理科的に非常に興味深い場所である。



この火山島でもトイレは清潔に整備されていた。



終日ランギトトで過ごし、1700 宿に戻る。ここで旅仲間が昨日の生ガキがどうしても心残りだということで同じ店に行き、生ガキを食べる。

DAY9 (16AUG2013) オークランド→成田

0430 起床

0610 空港着

0630 チェックイン

0645 空港で地下鉄サンドを朝食として食す。出発する時も帰国する時も空港は気分がいい。飛行機が好きなのか、移動する感覚がいいのかわからないが空港で過ごす時間はいつも楽しい。出入国審査も緊張するけど、かなり楽しんでいる。

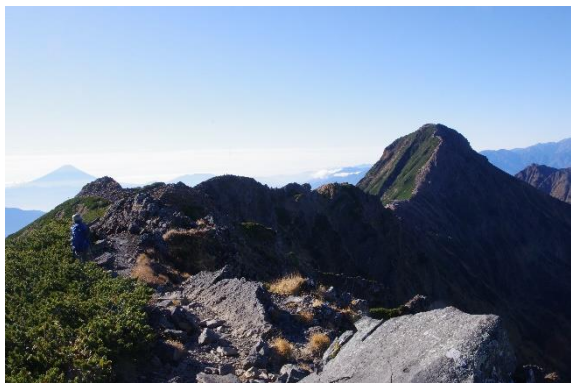
0835 発→1930 着（日本時間 1630）というわけで、湯治と生ガキの旅はこれにて終了。（終）

『INCH の楽しい仲間たち』 vol.10 その2

会社より山小屋のほうが居心地がいいようで（展望荘ではたらく）

土居将人（府中市）

前号では山小屋バイト生活をふわっとまとめました。意外と会社然としていて、そして牧歌的な生活を夢見たバイトが去っていく。そんな山小屋生活も1年が過ぎ、改善点なんかも出てきました。今月のTOPICと題したひとことコラムを書いて季節感を出そうとしたり、小屋じゅうを掃除したり。そして今回の寄稿を書くこともあり、そもそも山小屋はどう在るべきかと考えるようになりました。ナマステに載せるには毛色が異なる話かもしれませんが、少々お付き合い願います。



＜ハケ岳縦走中の一枚。横岳から赤岳を望む。＞



＜今月の TOPIC 7 月回。まだまだ模索中。＞

山小屋はどうあるべきか？前提として、山小屋は必要である。体力自慢の若者や日帰りハイカーには無縁かもしれないが、だから不必要だと言うのは自己チューだ。小屋泊まりなら荷物を軽くでき、歩きやすい道を整えれば事故が減る。もし事故が起きれば、警察などと連携することで助かる命がある。だ

から山小屋は必要だ。ではどう在るべきかという、どうしても「いろいろ特徴があっていいんじゃない？」と当たり障りのない答えしかできなかった。そうだろう、「スーパーの運営方針はどうあるべき？」と同じで、安く売るも親身な接客をするも自由、印象よく儲かっていけばいいのだから。

さみしいことかもしれないが、山小屋だって営利目的の企業である。勤務先の天望荘グループはその傾向が大きく、少ないコストで大きな利益を上げる工夫が各所に見える。働く側にしても、朝 4 時半から 21 時までの仕事時間に休憩を取りたいために、客の意向と仕事効率を天秤にかけ断ったりする。だから手が空いてたって、時間外に昼食を頼まれてもお断りするのだ。

もちろんそんな態度では登山客を不快にしてしまうし、それは本望ではない。ハケ岳を縦走したときも、他小屋のスタッフになにかと親切にもらった。小屋番といえば、小屋の主人に手あつくもてなしてもらったとか、到着が遅れたとき迎えに来てくれたとか、ホスピタリティーあふれる話を耳にする。そんな小屋にはリピーターも多く、円満な関係を築いている。また自家製味噌など食事にこだわったり、居心地よく清潔感のある小屋を維持するのも、もてなしのひとつとして好印象だ。

山小屋はどう在るべきか？ つい登山客のもてなしを考えがちだが、もっと基本的なことを大切にしなければならない。つまり「衣食住」の3要素だ。山小屋の意義が登山客の安全を支えることならば、より良い睡眠と食事を提供し翌日の体調を万全にすることが安全に繋がるだろう。部屋の雨漏りなんて論外で、枕や布団を干し、歩くたびガタガタ鳴る廊下も直したい。「衣」は乾燥室を拡充させ、衣類の状態を万全にするといったところか。そしてトイレや洗面所をきれいにしていれば、それだけで評判になる。コンサートや講習などイベントを催したりするのは、小屋を快適にしてからでも遅くないと思う。

山小屋はどう在るべきか？ 適度な距離感で、呼

び込まず後を追わずな関係が理想かなと考えている。トレイルランナーは積極的に計画に取り入れればいいし、テントでひとり静かに過ごしたいなら小屋側も干渉しない。ゴミを散らかすなら注意するし、達成感に喜んでいればおめでとうと言う。どの小屋だってそうだ。あえて在り方を考えるなら、衣食住の基礎的なサービスを手厚くし、登山客の安全な旅行を支える。という方針であると、今よりお互いに心地いい環境にできるんじゃないかと思う。

◇コラム 10 月 13 日 台風 19 号の被害について◇

寄稿の提出期限がせまる頃「大型で非常に強い台風」が 12 日夜に関東に上陸した。翌日 13 日の朝のニュースには、千曲川が氾濫し各地で土砂崩れが起きていると報道された。

みなさんに怪我はないだろうか。小菅村も避難指示がでていたようだが、昨日は他人の心配なんかしていられなかった。台風被害には去年も悩まされたからだ。ハケ岳美濃戸口から樹林帯を超えるまでの、橋という橋が流された。雨で増水した沢が地形を変え、登山口すぐの柳川橋も基礎ごとまるっとなくなっていた。車が通れるようになるまで 1 か月近くかった。停電も 2 日ほど続き、断水に悩まされたのは記憶に新しい。

幸い、今年の台風は美濃戸口に停電もなくやり過ごせたように思えた。しかし肝心の柳川橋がまた崩れていた。車はもちろん、現時点では歩行者の通行も危険だ。つまり美濃戸口からの入山ができないということだ。歩行者だけでも通れるよう申請し、今週中には渡れるようにしたいという。桜平という登山口も一部路面が崩落、大型バスは通れないものの一般車は通行できるだけ幸運かもしれない。

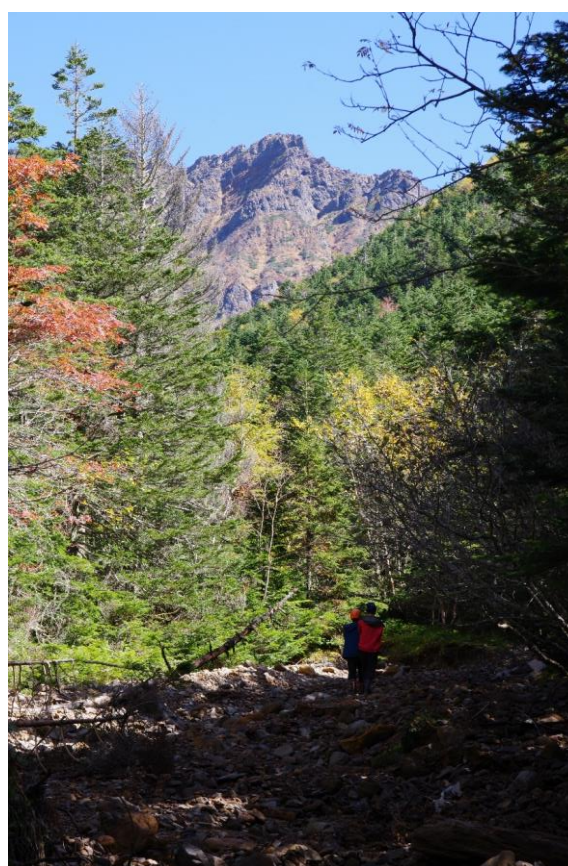
私も南沢に入った。数か所、登山道に水が流れ込んでいるものの、橋などには被害なく、水量が減れば今までどおりのルートで問題なさそうだった。むしろ登山口までの林道に水の流れた溝が残り、いっそう悪路になった。こうなっては重機の出番だろう。

といった感じで、ハケ岳は一応歩ける状態だ。今日は台風一過の素晴らしい快晴、気温も下がり紅葉も始まって、いよいよ秋の行楽シーズンが始まったなと感じる。季節の移りかわりを一番に感じたご褒

美をもらったことだし、登山道整備と冬への準備に備えたい。



<車も通行できる柳川橋は、今年も外れてしまった>



<ハケ岳にも秋の風が吹いてきた>

(つづく)

土居将人：高校～大学でワンダーフォーゲル部所属。大学卒業後に勤めた会社より山小屋のほうが居心地がいいようで、実家にも帰っていない。最近 You Tube を使い始めた。

(事務局より)：土居くんは、ぬくい少年少女農学校、ちえのわ農学校、こすげ冒険学校の参加者でした。スタッフ経験ももちろんアリ。



〇2019 年の活動予定のお知らせ（冬～春）

- 12/26-28 『冒険学校 まふゆのキャンプ』 @小菅村 2泊3日
 2/15 NPO 法人自然文化誌研究会 『第16回通常総会』 @藤野町
 4/19or26 『のびと講座 野草の天ぷらとお茶つみの会』 @東京学芸大学環境教育研究センター
 5/2-6の中で 『冒険学校 むらまつりキャンプ』 @小菅村 現在、日程と内容を検討中です。

※ ログハウスづくりは、メンテナンスを中心に続けていますよ～♪

〇 事務局より

「冒険探検部について書きます。1975年に木俣先生創設、1981年に塚原東吾さん創設、1985年に合併した『自然文化誌研究会冒険探検部』についてです。現役の東京学芸大学生は、東京学芸大学の公認サークルとして続いてきましたが、今年になって公認サークルとしては廃部になったようです。今現在、その確認と歴史ある部の資料の移動先（小菅村の植物と人々の博物館へ）などの確定をしている最中です。

寂しくもありますが、これも時代の流れなのでしょう・・・次号に詳細はお伝えできると思います。

ただ、このことについて創設メンバーをはじめ、いろいろな方と話したりもしています。軽い解釈をするならば、「公認サークルが無くなっただけ」であり、その志は潰えた訳ではないとも言えます。

シシカバも、INCH ライブやまふゆのキャンプの最中にやってもいいかもしれないですね。

とりあえず、部室の片づけなどもあるので、12月から週1で学芸大学へ通うことになるかも！？ くろさわ

〇 事務局の麗しき日々

- ・翔くんの結婚式に出席してきました。樽酒あったり盛大でした。
- ・やぎちゃんがおめでとうございますなもよう！！
- ・夏以降、人に会ってないので既にネタが尽きたもよう。
- ・青樹はシェアハウス生活での対人関係が苦痛になってきたもよう。
- ・本会の軽トラックは役目を終えて旅立ったもよう。
- ・善ちゃんは既に卒業式の袴を予約したもよう。
- ・最近の大学生は4年で卒業するのが普通になったもよう。
- ・宮本さんや雪さんはロングな学生生活を送っていたもよう(8年)。

〇 自然文化誌研究会 一緒に活動しませんか？

略称 INCH（インチ）。冒険・伝承・創造をキーワードに『国際的な視野で人間をとりまく自然と文化を野外において探求する野外環境教育のパイオニア』として、40年以上にわたって活動を続けています。2004年からNPOとして再出発し、活動の中心を山梨県小菅村に移し、子どもを対象とした『冒険学校』や市民を対象とした『のびと講座』『ELF 環境学習中堅指導者養成講座（のびと研修会）』などの山村の自然や文化を学ぶ活動を通じて、持続可能な社会を形成していく上で必須である環境学習の実践と農山村の振興を実現させるため、エコミュージアムづくりを行っています。

本会の運営は会員の皆様のご協力と、会費で成り立っています。ぜひとも会員の輪を広げていき、納入をお願い致します。本会の趣旨に賛同いただける方なら、どなたでも会員になれます。会員には以下8つの種類があります。なお、正会員のみが総会における議決権を持ちます。それ以外の会員は、総会にオブザーバー参加となります。会費は年額（1～12月）です。また、皆様からのご寄付も募っております。

正会員：10,000円 一般会員：5,000円
 学生会員：3,000円 賛助会員(個人・団体)：10,000円
 家族会員：6,000円 特別維持会員：100,000円
 植物と人々の博物館友の会会員：3,000円

雑穀街道特別会員（小菅特別から変更）：1口1,000円から

成合基金（冒険探検基金）：「成合基金」と記載してください。

郵便振替口座：00100-2-665768

口座名：特定非営利活動法人自然文化誌研究会



ナマステ 138号

特定非営利活動法人 自然文化誌研究会 会報誌

<発行日>2019年12月10日

<編集>自然文化誌研究会 事務局

<発行> 特定非営利活動法人

自然文化誌研究会

The Institute of Natural and Cultural History

<事務局>〒409-0211 山梨県北都留郡小菅村 3337-2

TEL：0428-87-0165・090-3334-5328（事務局黒澤）

E-mail：npo-inch@wine.plala.or.jp

H P： <http://www2.plala.or.jp/npo-inch/>